

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

Tanaka



文庫20
211
3

歌

明倫彙書

伊地知氏書冊

國朝

連歌學

次第

友の人にまことに親れども腸はゆのく
ちうとも友のよきどうのく腸と能く
入り居て筆三の聲へことく能く其
の独立して下り付く一句長ちく
すれ事へて口向ひ天祐の即代を之
御方爲ふと云ふと深く幸いぬる
ちう八百目もかうどすれん爲得
筆よひにあらわ

上本

發句の事

愛句三百數の長月も、主事の前後
をきく度いゝまことにわがわが
やまとさうと花鳥刀もよとまくと
逃去の婆さんとけ羽のくわうと
くわしかねや」と下の白山盡
もてことくし体字のうなま
はくはくはくはくはくはくはくはく
よいたるの山海他京四季草木花

法雨景共も日頃かわづほひ且
や高相公の母阿佛と云う人のわ
はま（はま）て多くに長月の音より
人まご教林はうこまくお時阿仏よ
發句を詠（よ）

阿仏

今日から秋のかえりが成（なり）
うみき「あれい人百韵（よん）てわ
はやくもあゆ日又ア往（むか）せ
しらよお句（く）ふやせ

今ノまゝあらがつめふ成ゆる
と云ふ事なり。河傳の云ありハ寺ハ題
城主モニ連教ハ有りとぞ同じ古
事づきといは時久也遠可と奉
ナマ候事りと候河伝の安井門院
して女房北平トシテ左近が
手よ叶ひて初見の女房は序より可
ども道と牛馬教へもわがかく
むかひりきもとひしむ者の方

はすゞく當時か移す耳立侍りん
すわゆる代にはま達への女房
婆娘が書す

とあわてて衣裳よかお晴雨外 須是
晴もつねと深れに染水 故
くはせとくすみぬ梅の雪よ
り原とれありともが那 良河
う躬よと脱身の今御のを 宗廟
様なまづりやまとん

郭云たるよゑふは小

小野家色出ても年

薺ははいたとひて一葉ふ

う音時雨かくひまふ

はをの蘿風のくちりとく

もはてうれすを秀うれ

たの枝かく風かく葉かく

花一本杜ねみ古の宿ゆ

小松生の海すうり葉すうり

魏晉

あそごは小草花葉の遙
けめぐらすよすよす水わきのまよ
して松しやくしに松じよす
子ひまく松よて城ひ大事の様く
もくよりゆくといきうちく
日拂葉花よ白つ朝うよ 心敬
此五百い佐勢大神宮にて法樂の
事よほほひあくよく者より太
神よといい封祭白れ侍あま共

そよ双鶴舞へ そふう正けと是
侍

飛行する花をもてぬ御衣

同

そはは赤の姿も身もソレ也
もやまく仕事もそもふう畜せれ

され發句アリ也

見よとす名を拂ぬれも事小
そまと羽と脇く麻衣が所誠り
化かす意も事と見て候。

空寂

見よとす名を拂ぬれも事小
山や雪もかな鳥の事も山小

吉須

名聲四之ハ仰ての毛もむし
ほひ聲はあゝね見よかね
仰聞えのこうとよ宿すれ

二陳室白象みて

夜もくめ月ハ泉れタすみ
鳴墨よ絶かすり言はゞメ底

風すく花がさく朝

滿度

はなをよろしく細ほのう
くく後群よそくけり背良の
おもひやすれていきほしも
かの御まほせは顔に挂く差詫
かくほくまほくとあくくよ是
かあはづかういていきほんそハ
きとよはゆきは歎がるは
て分限とせり只正法よ來

つらう泣くとけどもハカレテハ
よとむのれは勢く邪険よ會
信題く度句の事

月よきにいじりぬ花の身をつれ
此趣傍もとみるは雲ハ面向くて
月はいはけよ斯うり向く

參考

唐題く度句の事

紅葉ふれてもいやもと夕日下

此題在北山後四丈有餘

卷之三

太刀切字の如き
切るに似てゐる

九月九日

はすとくにかくは
九十九の山中
名をかくは
うねりかくは
八十八ヶ岳
すむてせよ
山やれゆのうねり
あひてゆきのうねり

切身のすゝみれども之經
色は脇脱と清てせうえにゆきと
くわすりわきほんか
ねどよふのねふづねと又
三せぬるのちと清てせうえ

發句れ西より切身の原て切身
あり名堂大也一をもく和毛たひふ
切字やして仕事のとあるま

おひの事多しはく脇脱と清て

腸くわく事

眼向ひ三時もくもくと清す無
し孤が音もよもじひてすり也
又射のいとすとし音も無ふ一け
すり要一もく一強らよ極てねうすは
くおもく眼もくちひうち事から
うれい眼の向三射のモ一しめうの空
もとあじ勢くもくをばして無ふ

又からふと尋ねてあつま
わきと極秘の教説が只のま
てもせよ

筆之事

すこひ脇すいぢりて同時並々
一筆れりて身じきまひまわく
さうりて一句に長くさへくさじ
村よ行ふと一句にかかはる
比興し体ゆるをもと用よ主事よ

トシ山川

てらんとよもれ

そよく坐てあはれかはるかひまき
たきてあはれかはれ又文字とてあれ
筆もわきとも極秘の祕すれど筆す
てばれまく云ふとてはりてはり
すくすと大めのゆ

一句難のま

鹿玉 署煙の月をみて夜

それ所より以舊て五月而て安達
信於にて様ひばり鶴奥山より零一も
はう年准化

一句痴之事

花よを野 即花よ五門 月よ文和
森よ文和也 紅葉よ龍田 雨よ星
墨深よ夕ノ色 名字よふるも
かれよけりき ものよまやよれハ
きてハ一代ハ准之もの厚よ文も

志よ早雲一 楠よをハ雲一 花よ楓
とせくに次但そハ有ひとま
太い弓連歌の病く他に主ひと
一句邪病之事

かけねむも圓り鹿の聲志て
そそげりとあはゆく夜すとま
ひぬすと一のよ夜分即 かくぢ
一百日越えと云邪病の名も

一句重絆之事

今朝の氣

扇のう努

晴雨のめ

音トトロ音ヨテ漫トトロハレのモ

羽ハスねハシミトミトミトミトミ

何事トトロトトロトトロトトロトト

モモモモモモモモモモモモモモ

トトロトトロトトロトトロトトロトト

トトロトトロトトロトトロトトロトト

トトロトトロトトロトトロトトロトト

トトロトトロトトロトトロトトロトト

要多々ナリナリナリ

冠不走モホモホホホホホホホホ

白森ルニ高キハ袖のれぬとて

そハとの向ヒムヌムヌムヌムヌムヌ

トトロ冠ナニ高キム

禰不着モホホホホホホホホ

はねしはれ世ヨアト又往テ

此の牛のセモ用モナレナレナレ

ナレセヨアトナレセヨアトナレ

れよ三羽をすくはくはく
社へ重ねてあそびに来て
わらひのまへゆゑの此道よりうるる
ハ能スアリ

皆禪と見爲ふ事

白鹿の毛來ても所のうき小
柴弓下の火多乎を詠し局來ても
毛が下れまくは可也

圓鏡の毛事

毛もての毛れ毛
熊の皮大山の鳴音よひて
けの毛の毛に何てむわき回そとも
毛拂は原毛のよ
しゆふう肩拂けひも毛す
か拂ひもあく毛す
奥山よ高山吹ひ風毛のよ
れもくら毛よ毛す

れひくまはゆくとて
夕空やもみれれりとて
おもよしていとハ松じせすよ
もま秋のもうかくされ
先の後振り松のりしらして
もほはててとくとく崩られ
さしてあやしくがれゑもとせき
あくまきハ君よ仰てよまむる
やまとけの原よハ似か草の花

此の跡あくよゆう事、只おとく
二度三度あれどわく
旅の野　也の旅の夜またか
きのよろく

皆そぞ口きこ原いそよ准の歌
ねえ立のよ口き多く一方別れ
ゆきにまこと連歌にとてとむか
うはうりてりとも身もあまき
詞とソリて口くびのいじま若

きは面白ひより野の山

之意病の事

見てがほんに御おもてて
此處まよひとく行ひて
まをよりれの向むけたり旅する
ゆうじと此へまよひ

難の事

あらわすは被ひやましく
いざなひ山尾よみゆ

はあらわすいふをぬる間の日と
はてても山尾はくさむを極めのもの
くはくふか引きし候ふ事也

字跡の事

そよいよ月の空の峰もも
ケねよ耳よたよるい行脚と若
かりに假合ひ

あふか カガハ 名うち
元のをひ ものをひて ちをの顔

不整ハテ用の字成候事一、毛毛
と毛本シヨリ字筋ハ一々長る
りさんとめせよもねりすこ
それよいもん人のゆき風霜
小あく吹けりとて一向よす御見
ゆき行は候子まつま

用材トキ

残り構は別に東山
毛は毛瓦のもの役す

そこもあく次向ててて
笑ひとく人よひ出で来て
毛毛西白毛毛毛毛毛毛毛毛
八事たぬれく地に入来りセ

因事痛キ

一わらけられ毛毛水と
青山の曉すと毛河と
鹿れう人のわらけの山
枝えお翅よがて厚ひて

此あひて腰をもつて腰
独立病といひまづ腰や下背
と同へくちう陳物と射らるる
筋病とそも一様秘辛

草木と草木のる

梅の花の事ありしり
わきかはまはあやう天下
口同音を
一ひくあらうすあ

林せよれよみよの忠信
末の日よと不めの事はやんで
みそはあやの處をしうり
まよのうもとよあはくとて
かの御用事の城をかゆく腰工

あらじ

13
内事

思ひの事よ御用事とて
あらじふくといひ誠よ

而白一そひあきと月ハニ津
やよ成り白

坐舉病句　以下頭句射

遠モシロ

津津亦昔日行も寫手にて
り爲テ才氣のすれ清て
り能よまびんぐ所白也より
アヒ生するい誠よ也白一志ハ

あまとかのる白辭ハ三日未申ら
ゆくとも頃のさうに待てしむ

近モシロ

志山の志が到鷗の志よんで
始の浦とも處よ神人て
かねよもさゆと近くもすと近
キと云や是も三日目に清石の名
シテ始てしむ

眺望の

夜のをも言ふ事かと見て

今うそよしの月の山す

そは晴やの白とまく東風風情
眼をひきと追ひよ仰すり立候
うあらすじひわくし初の時ひ弱
有らぬくねく音ねまへそはあ
（たゞとそは三句目拂事也）

於上院後

ちよし人とぞやくかまて

雨れ夜よ月れ丈の松の聲
そは馬上紙持て下して用よき
うすり一句ほのね松と初ん
の耳よ入るまし能く深て有

よよ仕

於後院上

けぬて老木のもよ夕霧
そは夕霧のむ違ひの洞の松よ
聞かよけり木葉深よ秋事す

すら能くらむきに

正の句

水の月すら能くらむ夜れ宵にて
かねよ有のやれとおを家が正れ
句とえやうへくちゆよせて在
西向れぬよとへくらむかくりとて
かく西向るわうかくりとて
はけと初から時ひなとす也

有文のとおは葉

ち遠一 築士よのほへともくべ
もひすれめれ有事し因よそくね
の絆よ仕立とおは有文のとおは葉
とおは葉

とおは葉

すと文のとおは葉

次はそれれと野サハタメ
月の丸いをかくよかく
そい有文のとおは葉(とおは葉)

とてま新いと文のとおは葉

古事記傳心鏡宗傳

有がむとば葉に生

かされむとし海山の山の

事はいとて御の草よすせ
何事に者よやくに於くさく
りすきんとあらひ立つゝせん
なまくよれくともうらうく有く解
とくとくも因用くの入事しづけ
てす。

ものと木を葉へす
いはくとひへる果とくほん
花よづくくわよむかくことて
青ねぐらぬづく山からうみよ
明くとや鹿うりの水へて
かくくよ根くの木とぬくはくと
もそハニ奇の亂をばし

射向へ事

古事記傳心鏡宗傳

ねを、うしもたむて

ひくよ月花のゆき佐用事からむと

すくゆせたいとみこしとよかう

次聲の音よ哥北席すじは筆引

まぐさと対りと対りと

ひとせ一勝てまわらうと

白とくはく

絶常此朝若風をかの

はい白と事

往復にやタれどよ音附て

是處はいゆと云壁に廻るよ聲を
付けたよ竹と木と木のきのよえれ
きくは付かとすよはいゆとあがり
對ひはいゆ松と松もほくまゆ又
世よ勝てんめぐらすとひく對ひ
といひせよゆうもとほいゆと

二字ぬべの事

門ノク木葉葉々雨、うすあわ

乞ハ申セ文字ニテモアトウ也
至一タクニ字ゆきと云也

二字和意之事

是坐ら強のあれ朝に事
そハ御のを朝郎ニテ而白はり
され二字は和意といひ滅。脅
がれ何事とも白い事ナリする

射付之事

いぢりゆう雨ノ鳴聲

ト朝の月よつまん郭と
もしてくはむすばく
毛櫛まくよじてくまで
此のちも海とすれあふ事
村のむすけ合体こすりて

因意仲通之事

苦はるゝ事は下草
氣はるゝ事は人間の事
細き道といふ人が多くは

山河の橋丸木よもよもて
後も前もう駆かわすく汝

子ひもくらぬて、親の才よ度て
さすすりて林とくもれ
やる野の草ねしれはて
海いづくぬ月はふれはて
引嵐一日きよとす風て
七夜すといゆぢりいあり
八重櫻むく斗つなぎて

たととはくす罪よどみや
砂くはれ闇か升の水よ裏道
うあとうとれ草のタキ
山く井の月くね縁より地より
玉糸は類の因より圓鏡よ
き歌の長むくゆてひすきに
能くすまゆじ

あら城裏を事
かくゆうじ思ひ前て

これとばかりつた筆ぢや
は越したて下達事と云ふ末だ字
さう用よだちを背徳の如く
遠ひて能むるが筆の如く嫌う
ありゆ一筆の筆すまゆ

一白續も下を取の事
本筋も下にさく方の筋もて
し手も内巻の陳りれ次て
毛糸も外縫も下と筆と云ふ

木の間より月より水報にて
今宵もいづるてく汝をう
ケ松の趣ハ玉丸何きも能く
合せてますひ

山一木を筆の事
月も山の寫らへ新見て
白波の山も遙くもてて
是がうるお水筆と云ふ何筆と

不芳一といふ

一句角よ本懐の教を事
懐の句よ一句角よ二毛

結ふ時とき

はくはくはくはくはくはくはく

かねの句よ本懐の教を事
本懐と結ふ時とき本懐の句よ一句角
内よ二毛よ一句角の句よ一句角よ二毛
取教よ馬づくもと本食すもハ毛
さう本懐と結ふ時とき本懐の句よ

うへ立た方よ本懐の教を事
立と結ふ時とき本食すもハ毛
懐の方よ二毛よ一句角の句よ二毛
本懐と結ふ時とき本食すもハ毛
かねの句よ一句角の句よ一句角を

枕羽と事

是行の一よれよよ詠行
わ花よ花羽と仕立と一句角よ

二句　えうわまこすを爲し候
鳥ねむの候　玉露の山　玉露の山
め此の様

陰題へ事

財を失ひてござりて居ればもうち
かねの損くそよの財を失ひてござり
其本時かねがくでせむと何て
ものも常よつて御よますすけ
かく一毛と云

左平、秋の事

鳥ねむは後のみゆに樹もする
ほもじるよすもする

は歌い古事、行軍の時、山鳥赤人のよ
れ歌くよみのれや身侍ひよはき
河原くよ千をとせく千をとせ
よはきの河原の紅葉、又秋の景
もさむじよくかとゆく樹は
紅葉の山の紅葉の山の紅葉の山

今宵とてきとてくの風が吹きよまうて
トシセのまつ月とくらべし

は風が吹きよする風よ云やのむ
まつ月とくらべよ古野の猿と似
合ぬし方よもかでと云よをやれ
嶽の事とくらべしめし方よもかで

よすうせんねりくま
宍道山朝うせき一旅
えうれつす林わらうくよ

は歌のソリと歌の音と音とおも覺て
佳作能くじ歌の心絆と未絆と
すりそれにすれ絆ふうひくら
新あくじひとうひ絆とおつ
絆とおつ

ともれちとてくの風が吹きよまうて

まつ月とくらべよ古野の猿と似

は本歌

東北風と北東のせりか山

とすきにのるよ
そは憂傷の音と絶えず
心とかへりぬるとなれ

物のかげにて
てか教和聲より聞き音せし
此が哥子

せ翁角持紅葉歌
せうわくわくわく物をか
は秋のいととて絶となりて

この歌は教へゆき教へず
歌に二句よやくのくは後加教
みくは若くは歌連歌といふ
月はいやもきひ

わざりこども歌り歌の歌の音
をよそと教ね相はれ
とせりに歌は相はの室は唐
ふかあんていすらうらと月の
歌ともば歌とも歌は相はれ

寒の意とゆうべ　山を出づ
月はれぬて　云本歌にて　村方
すり又雪　小梅と付梅と雪　山
村にて能　梅、枝と雪て　うめの
雪はるも　御自身　は　まく　うめの
山　よ　て　雪　うめと　まく　う
梅　うめ　うめ　うめ　うめ　うめ　う
と　人　うめ　うめ　うめ　うめ　うめ　う
うめ　うめ　うめ　うめ　うめ　うめ　う

きてハト云再びて　音有りて　云色
丸石歌と　筆　古今集　續
後撰集　十代集の因　用　歌
近代の集歌　五百　歌　他丁　歌
うめ　うめ　うめ　うめ　うめ　うめ　う
院　あ　百首　と　代の集　入
い　よ　是　小　歌　永　歌　不　確
人の　あ　歌　不　確　と　付　有
好　用　歌　うめ　うめ　うめ　うめ　う

哥談りもうち前かたにひきし
物の時、只あつよ、い除て生まへ
則事すぞわづめく也と

本院取の事

ゆくしりやあくは左室
翁の柄れ柄れ。と爲る
此題中後もあくに本院書
内閣の書籍にはうそと云ふを
うかがて、評可有事、其

いじゆう強てすあきとすり
らも連歌ハ古人のよと、壁を書
抱きまほて、身そらん人のか
すはりと、やがまのまん
布の邪魔れ、うりん、も図書
其後二句は前と、信頼

物語付之事

信頼は、うりんの事
生駒山の事にて、人にて

是は伊勢守のものを御重んずる物も
平句れ京氣よりおもつ深く人へ
もて遠慮する事多し社かむに
すなれば我れのれどもまかう
いづれとぞりて ちりとて又
て嫌まつねの風の古事記也
ふのくわびすれひ正路とくま
やすりは往來よりよみがはるの
連歌何とくわらひまと遠遠よ

口アリ事へ次より御涼のサトよ
ほんに大詫のゆきといふと可有
まふ玉手ハ二年以來とく等

高野斑山本紹印教書後半

紙巴單二帖

乞
候

おもねり候
およそ社のまき

紅葉せぬうけよわす
侍^{ツチ}す

禽鳥^{シキウ}草木の類^モも何んばすら

トトとあらゆど引^ハセてたれの月

ト一輪すの紅葉^{レバ}くはなむへ

陽^ハ候

あはのまよれむシト言
待よせしるすがを云候て

まへ一恨と云候てとくま
よハサクのと一實わん候ゆき
白と武門神と云候承す太陽の
神といふと五色患体壞被傷
ホリ陽の神肝脾より白山と云
陽の二つといふと申す也御主上社

長弓ノ射

車はくらよ白髮
月夜のと人立文
先は寢顔あ廉すと云脚林いす
衣冠正へと見て玉樓金殿よ容
らうとくアモウカ大帝も見
ゆと云多也す

濃弓射

あはのと胸すさりともかく
ゑひり葉いじう弓

右十に掌に心より有為時慶と記

種事誠よき妙く

西白艸

竹一村のうけよあいこうりよ

えぢ半開てんすくわく

皎潔下千村立す夕霞は夜空

幽多可

一節玉軒

あらうすひよ何よまよ想ん

鷦鷯毛夜も白折の夜よ

白折の神れ朝の夜てどよめ

开よせよ誠よ一節玉軒

桂賀勝より社

刀引の旅

ぬき居一處地ちよよか聲

小山は高嶺の朝日朝暉て

東北のゆけて自氣もと家より

はとよきて田の角は旧露

左十に享徳四月有為時慶と記

神事誠きめく

西白艸

竹一村のうけよのじりと

いまとや来たるをと夕霞

皎潔下り平一村立す夕霞は衣寧

幽多弓

一節玉輝

あらうすひよ何よまよ想ん

鷦ねれれ夜も白折の夜

白折の神れ朝の夜てことよめ

开よせよ誠よ一節玉輝

道雄勝より

刀引の旅

むきしよ一處れどもよひ聲

小山田は肅穆の朝日朝暉て

東北のゆけて自氣もと家より

はとよきて田の角は旧露

も二三月ばかりはまことに舟

誠服院前社

表より舟

一ノ月ばかりはまことに
鳥の音も老人の歌と見る
白練傳來すと共に感物し
誠よほ重なりや

存生と解

是より日をすく年老

あすかうやうまはよせ
感風をうれしゆく
ひがみのよ

白練

さては星の聲ともうな
哉この日よき山の秋のや
今日わざわざお福行水口
「住む事」とわざわざ筆
ひそむと見てと侍

感有辞

本の間より是れ月の夕景
ほのすれ丸下草小虫等と
誠々本の月のほのすれ小雀
うなぎて草から枝すり虫のやう
ほのめぐられ京舟も古事記と
して御す迷ひといぢりて
はるか昔からとてすく感心此
すくい年

肝要解

山岳川水のりおとせ月と
旅立一たぐい人をヨリもよ
ツの山よ水のりりびんて旅と
宿すすむとく夜泊ははせ舟ひさ
はの寄合ひゆく人のおとせと付
けりはまくとくとくのあとせと付
けりはまくとくとくのあとせと付

秋邊解

秀邊解

夜の吸ひ人たゞくと
衣はゆる事す
白い面詮あらひて誠に殊勝

正徳軒

地に立て若もやうむ
身をいたぬ門より來
くの中間よりかきてとまわ
意と是侍

平心之軒

宵り徳重里山の旁
とうとくも今年のこゑ花とて
ほよも蝶々の常のふとすと姫

静月

正徳軒

誰もれ冬をさうめうり情け
しうれしれい良士のみら
ま縫の正宿とことづくとす
新小換入せむ何ん誠に美は侍

新文部

りり、森の里に生まひ山也
小森の山　墓もモモモカ
くよれす　其とソウイガ
或日親の宿のまうる森乃
モモト　承　後日　付モカ
　　説江解

名和井解

こゝの野と山のかれ
伊吹山と山かへてむれ夢
此處熟　て　孟龜　侍ニテ
旅もすれよ耳馳ぢる名不外た
ひ　云出好徳　懷歌而之
　　本より　字孺　本
の聲あつてえ、らま　侍モトモ去
也モトモ本より　付モク印

うとうとすり能く浮てまう

四日替

身代わらひに鐘いすまゆ

黒雲も今い面後のお文で
かねよと組合せすりふくよお
白よれ想へてのうはいはよせ
おおれんのそりれつておよりは
祠と残すり神

きくまこえと月かりの聲

東洋爲む生の小萩ゆひて
おおやくとく徳之達の祠と
まのをれとせりて

堆と村と神

西本草うり巖の秋、せ
男康すくか山の奥や附あひ
お頃の松竹の白い宗砌ゆび
一て悚ひ深くとくと誠く
とくとくすくと木散ありよみ

奥山の月夜はすこし分明

月社

心面詩

かと秋せよはよわいあき
暮るく尾花ともの夕月便
けのへりてはるはるに往るよ木々

感歌の聲

柳や、翠峰まで散る
道すきのむぎの小森森源

寂の意に風と待つてうる柳の
音もすずしくありて又秋の露
とてはるが柳のうる歌

のうる

心面詩

麻生の東山をすまなれ
下の人にかかづらうる柳
のうるがりすりはせりて古の風
のうるがりすりはせりて古の風

めうりていじわらにちば迎高峰

とくすり

行毫駄

あひよれと一書いも、かし
教うしよ人の先生とおとさん
さる有明の塊界生はる東と西
すり所と能く是を幻うして

写古之体

音とやまとれうきよ

正月

七日 ははあて
何れどよむか在り當去とあひす
白とて字古所

桂鬼附

正月の軍地庭より出づきて
やまくらむと誰よ 回りへ
いよこり おおたけおおとけの
山とて居すよおとけはすと鬼

五言

五言

不安の肺

さりへすくは炭火を
じて世に於くやまく有
堪忍力が肺と云ふ事不妄
の肺と云ふ

隠題の肺

抄りへうてよれ古
絵ともよては光の独眼
伯牙絶絃世上うつむけよ

琴の事は独眼と云ひて是
食煙肺

人いふのよきいふの肺
處へよじて無事もか其事もて
そひ前の人は人のことうるさと理
て仕事もあらわもする事から
化意の肺と全體と云ひて

遠白の肺

音はけてあはれとす

あらわすやうせつよしのひ
忘く衣傷迷憶かくく歌行れよす
まの事ゆきい行ひて萬句乃句
と云へ

坂戸の体

車もこづれ子供もすまら
鶴巣大井の宿もすまら日よ
前のこの車は火宅の山道也
牙木不い源氏西行は宿の坂戸

母の大井より出でられ不しうニ歳
てお出でまじめに上の上はお姫君
よめはあらのちよ源氏お姫君
旅す母むかすみの不と二車の
佛ふと金せんと云誠奇妙
すまほのまかねりと白一

大井の体

巧まる体

大井の出でまじめに上の上はお姫君

照月のいはの鶴子に
いよも葉て闇と清ん歌
付まきかねの鶴不堪す
學へ必邪既より入侍り

左教付事

國入り長すれらをせ
せりくは山のさりさ
そはお教つことひらへちゑ
右學へ鶴

鶴
大表の代といふ
掌あわの大和と此葉
余女、歌は言はるのよ
とひらへ

右達(すり鶴)

四て工よ人ほひゆ
難あと金すこりと問ひ
は鶴を基能のゆかねの名
を初めて学は必邪既

入る

射すく絆

さよの室のまく印の方
角の毛はとひよ鶯すみて
かねよ射す。白は射すの絆と
ふじ詩の射すのふ

京物と絆

いよいよもは行の下れ
あす月あるちのけよ

かねての向や京め多入やも元年
もむきよは京風減よアラ松よ衰
あやかよあれよよおへこせすよ
あれよ一丸よ三つ三つは也すもう
こみ待り事 比興す一へ候ふら
射す

矢もと絆

此分のわといはすから彼家
恋き紅草の氣のもの出る

此の御先の精貴は初く流學の雪
此肺を以て筆草上口にて之蓋のす
此云行はん誠ト邪魔風車トか松
木前も呼出ひ能熟すりの自
然の一具よ

尺経ノ射

毛葉毛葉秋より

花の後毛葉様に紅葉

そひ毛葉の年月一キリヤテ

下毛葉毛葉此地

邪魔肺

毛葉毛葉毛葉の庭

毛葉毛葉の月と人役よ

毛葉毛葉毛葉毛葉毛葉毛葉

毛葉毛葉毛葉毛葉毛葉毛葉

毛葉毛葉毛葉毛葉毛葉毛葉

毛葉毛葉毛葉毛葉毛葉毛葉

毛葉毛葉毛葉毛葉毛葉毛葉

己と

慶長貳年

三月廿七日

紙巴判

可思惟の辭に事

儒教道の之にみれ得たり在
立也ん。惣わら事、至善より
此は定の事よ當言ひづめりて
聖人曰德おほし。」
極すすゆ。斯もれ本の實を心
経ひ難苦ともゆても法の序入ひれ
心経すとよき世以道としてくよ難か
なり能知りし虛無自然の徳理

五山本日書き

其本者一子傳ぐ秘を子文金刀流後藤氏
他是有同浦者也

絹巴在判

神祇の御事傳來。御窮屈事句
は、御前御切御事句御事
代乃御寒意多御道御事
とありて御事

詩者，所以託志于事，比類于象，故能無往而不通也。昔
周易之卦，皆有其象，象有其意，意有其理，理有其數，數有其
用，用有其時，時有其地，地有其方，方有其氣，氣有其形，形有其
聲，聲有其響，響有其應，應有其應，應有其應，應有其應，應有其應。
此皆自然之理，非人為也。故曰：「聖人與天地俱生，與萬物俱
長。」

梁天子詩の付よ以てと云ふを
言ひ候はよこを詠ひりとがる
佛方寺小首銅鏡（アマカミ）てあらセ
此の社中よりひしも有りぬ當時の
軍裝相共（ヨリシテ）乃しんや自讐の如
解ハ思惟（シムイ）て有す也

和歌ハ和風（ハチブ）也信して其徳のる
ま事（マサニ）涉き山の浅（アツシ）ぬすに社
ノ門とよもやくおはづけすすめ

白解（シロハク）りりゆ（リリユ）又左今集
に歌（ウタ）とひりすりりも解字鳥いさ
を解せきこども歌の細也信（ヒツシキスル）て
うんへ遠處（エンドシ）に有事（アリハシ）次は深
きよ専（シラバシ）を深解（シラカシ）の箇（カニ）を繰
りしも物解（モノハク）身（カラス）無我（ムガ）不（ハ）有る發
事（ハシマリ）知てヤシハと從事（シマリ）と云
れぬ事（シナシ）よ、是モ一の思惟（シムイ）也

雪月花鳥 四化志（シラハクシ）にて又月

花すもすゑのれおとりてはま
る郭二月もい連放れおと風雅れ
余魂なりもてのき人を信ゆ量
ねぞくともひみよはあつてり
そア後をん流ハス也花多刀書は
礼儀ハ此道の肝要ニ思惟り
但自ら名をすらゆ出日没ハ不可斟

酌ヤ

郭云ハ夢もむすよゆいく取清と

キリ群書の山をよむとへ余代
わしてよしも初音や高行に見れ程
首より云うやうやう徳ハ嘗すよし解
かを意成、重一言ハ時もよひあら
事務丸身近持ても聞してすよし解
けすよし解合すよし草木鳥獸
もよし解合すよし草木鳥獸
もよし解合すよし草木鳥獸
もよし解合すよし草木鳥獸

是日唯すよし草木鳥獸一也

月は景のよ筆も圓は夜もひ雪
あゆみせすしん白紙絵くじゆい
かよおうとまうりを月をまよすゆめ
けうとて又くもくもう書れどもか
と月を絵て下とおりかわく紙やう
白紙もゆくともうりは月の意を
絵てシテ墨はえむ日をやうの絵を
月よそし金のれ四雅す

花の意をもすか絵ても紙也蝶とく

芳の事と其の事もはる紙も壁に
つけくわくうちもとの山ひいしことは
もの明ほのすゑも紙も白紙もと其
付けて紙を事とせよからずやう
絵一た紙の白紙も強拂よわゆく
月花の貴人任せのゆう紙は月花の
意もとく誰も思ひこゝきて
とよの本意もとく墨をすれひすり
只何れくはすよ材よがぬ紙

すとし次第秋より其の書をも
夏秋より定まつてゆく類の元は
必ず上にすすんで此れも極ての元
合法なりあへばいふ村うりても
元のものありて所あらはる雅に
と云ふ事也にて筆出一のものは
貴人おせなむて、有用たりこれも
是又異端の一也

初原ハいももサクシラハ國すりふれ

お下り數あらひるより白旗をもふ
やうは是非ありき事に化一准之
何事かわゆきふるが故ぢり此と以
のゆふ往う事惡へた處のもの
よし化のもの化事と異推す
實在ちいさす事と深くこめつま
き袖よこかきてももすとから
とねじは男の身姿はつゝ身
山歩ひてかよひもつかずはばと

人を社主様とする事す
衣の別番又道主の番り
洞門袖と肩口也
金匱宿すありて之は寒の國政
城ふる御所一泊仕立て社主の事
走りおりあまく便行すりうしよす
衣深く闇からむと動きうしよす
至り也緋色の羽ソイマツルく爲之
ふあけんが手の毛リキナムヘラ

村主延尾白ひつ立てきやくよハ蓋
ゆく唯人城主より松木云を以て
是ホア且惟の肝要す

海士推主すれどれよいやソル神い是
おはゆるゆるれ松木甘て社主に
せいぬく候め月やとれど、ねまきを想
ひかくちと詠せしとを城主曾
そぞきされ連歌ハ空すれど
じまきをいも猪もアモルは本い

かうに於てと云出まひ耳よも立處は
してやゆほくゆはおぞらくと云は
は事は事へ化ハ准之能也難也
ちゆ小道へ因准ゆうすま社
多事も假令僧荒老へり人のが少
少事もじゆめううりくを
よ事もれの趣云出奉事へ肩捨背
筋へみよ葉のゆくし色くすり
白肺へ老の白よ仰合源准也へ

らうよりぬ行ひきまへ又鬼火入
た。は白よは墨の衣羽衣へ或
前半山の奥すゝむ住ては珍
珍はるやうもの白肺ありけ
玉あね合さうゆへ又ハ世主と同様
トシ半身へ四ひじとすら爲もば
新ひりもむれの趣いと小競ありて
いたら神の事といひすれいかず
主世主かよと云御の事

お事へも仕事へも手を出さず傳へ
ましく正氣隊とのあつて
立往の袖は偶々世にうかくて
やひく身の行儀とても軽じ墨聚
れり不思議御のめい跡りく汝
故て老矣僧侶の身よはせ自の
白は延ゑて化の身よひく
かく主も有し余は是と准て
能事のよし精詮の詮へくま

あく事以來て云取よかまう
社ね云落の戦事とて口過よ
云をきと只正法と取其方よかセ
れ流り乍意と争と辨らうとし
大もい云あれば白れ姿よかまう
のふをくわかぬ也よかく
はく異端ありて事
いふよせゆよこもれとおらよ
またうたう哉別か私の事へこの

みてはうそうらんの金持

四推

神祇ノ教祝言追善難立すとの爰
白師徒と詣すてハセキ事なり
サレガハアハナ難の安久ハモシ
ムアソテハハツ四推あく
ナシ歳旦生老の事トソ銅四十
キナヒ人ハ世事シ夫ニ常ハ
四推

名残の花と匂ひれをと之事一も前此
向西ニニ東のうちよ時ノ宗西
水木立高とはモ伊勢と稱し
之又モ花木と花木の名出で宗西も
號せられ有モ匂ひの花木ハ云々り
其一て巻頭を軸高月光脇す
三根筆序ハ一毛の肝要モとも切之
のつゝ不すれども終モ如くも
紫のかねの下と好んで是へり事

近頃あつてかたをもとへ一旦
辞退するは、ほの匂ひのたのもは
うちのものでござるが當面するには
おまかせしと存候。人の姓名を出
まつておはなはれど、何とも一の
黒椎也

名残のわざ舉の三のうよゆよ
ても奉て不若志秋のうよゆよ奉す
とくのうよゆよ奉るに極くさう無

まじ回一何きも二白家けよてひ
お若田全方よりは承蒙れりよと
舉ねいふ叶ひよ西づきを始業
いあらゆく片よひく滑走り事く
旅よ衣傷めに考るるもとひく
ら度不往行よともせず税金よとく
やくいあゆりてあかくせんと
ゆくとくおせんへれんゆくとくれ
思ひぐやくお奉のをうとて、よ

主事の御令をうけ候と申す所

宗廟法原十九首の歌の内より
ドモ十日と有様の事と此れ
よく説く事へんがち私の方もさ
くら來りてうるわしき事、正に
趣向は千変万化行くにかぎりて
計新もとちとやうき唯ひいき
の軽重とあらまんあへたゞから

並の事あらはりもかく才の
又存すつめり時いたずらひて
白はりとゆきこく行はばりす
せうじ一束の西ヨニシラヒ多
白れぢやうれ誠よキトれ事より
うどに席の奥と便一腰と之度
をもじらすれの腰席の旅宿と
はくらひて席破急の四堆引票
まう

夢想の連歌と書時、夏とすゑ
次に遷なるむじゆくひはく
すとく云詞とよばれて有ね興也
日待すれど連歌に待月がいづれ
と霜月にありすむ思ふよめでて
すゆき事じ思ふは是よきも

て日惟有年

首達ば夜をき歌よひ本とてもた
りすれり行乞を無波のちま

馬すりとて夜の月を川用
走するをの顔を林すらすやう
余いづるて日惟有年

此長の連歌よひ衰傷ふと嫌すり
あとひ別をぬほれあひれども
立よひてもかからう又あとの
かくわきくらむ汝やとれ
網状様(余い准)て日惟有年
移流元服鷹帽を差補毛被

解かれて此を承ばず専宗仰九
哥れうちよりわく是の日をも
らく思惟うべ

五にて社の連続は離別西半
あれ身に生ずる所にて可からし
被ふたりきりめぐれておこる事
よりは便能くキアリニ要す
然もハシモ澤らを以て懷舟は情
して毛拂へハ社の善くらむ出

物事は必ずかげてどうか
ちも其處一ない所もさうしてさう
あまハとて是の事以來云ふす
よハわくは、し近長の連続は離別
哀傷と極めて心痛く、したが
いひゆる其眞の心あくしはく
そひうそべし也いまとすく今
いづくまよしけらざんおひと真
手すがれ、而詮林もと治定す

其真跡の懸念實在一門ホミタレ
壁雲ノニ處を參行すやの名と付
子不見りてれんの儀トヨリ無の
よしはもと松並あつゆ
御小言を施行の至りとシサツの
主が其身外不作不應トテ禁
とすりやむほん其時モ既ん
モノ既往ナム也

此一冊者隸諸一通之
爲秘書依御不令今
相傳之努ニ侘足有
浦老也

元禄七甲戌七月吉日

本戸常陽

朱印

小林氏
乙中雅文



